

形態論的に見たスペイン語の色彩表現

Observaciones morfológicas de las expresiones del color en español*

寺崎英樹

TERASAKI Hideki

1. 序

日本語では色彩名は「白、黒、赤、青」などの名詞である。しかし、これが修飾語となる場合、基本的な色彩については「白い、黒い、赤い、青い」など形容詞が用いられる。一方、比較的歴史の新しい色彩や中間的な色彩、さまざまな色のニュアンス（色調）を表すには「紫（色）の、藍（色）の、緑（色）の、だいたい色の、赤紫の」など「名詞＋格助詞」から成る句形式が用いられる。¹⁾ また、近似的な色調や中間色を表すために「白っぽい、黒っぽい、真っ白い、真っ赤な、青白い、浅黒い、青ざめた、黄ばんだ、黒ずんだ、赤紫の、黄緑の」など派生語あるいは複合語の形式が用いられることもある。このようなさまざまな形式をまとめて色彩表現と呼ぶことにする。

スペイン語の色彩表現について観察すると、色彩名は当然に名詞であるが、修飾語となる場合は形容詞と名詞、さらに句形式にまたがっており、その分布の仕方は日本語ともある程度相似性を持っているように思われる。そこで、小論ではスペイン語の色彩表現を形態論および語形成の観点から考察することにしたい。

2. 単語形式の色彩表現

2.1. 色彩形容詞（基本色彩語）

最初に取り上げるのは、正書法上一語で書かれる形式である（表1参照）。語形成の面から分類すると、第1のグループ(I)は単一の語根から成る単純語の形式である。その代表的なものは、色彩を表す名詞であると同時に形容詞としても用いられる語のグループである。表1の品詞分類はすべて修飾語となる場合を示しており、このグループは形容詞とした。たとえば、amarillo「黄色い」、blanco「白い」、negro「黒い」、rojo「赤い」；azul「青い」、gris「灰色の」、marrón「茶色の」、verde「緑色の」などで、いずれも使用頻度の高い基本色を表す語彙である。これらを基本色彩語と呼ぶことにする。基本色彩語が名詞として用いられる場合は男性名詞であるが、これに限らず、スペイン語の色彩名はすべて男性名詞であることが共通の特徴である。形容詞として用いられる場合、このグループの語は、一般の形容詞と同じく、-oの語尾を持つものは性・数により変化し、それ以外の語尾を持つものは数変化のみを行う。

なお、これらの形容詞は「de color + 形容詞」の形式で前置詞句を構成し名詞を修飾するこ

ともある： un jersey azul 青いセーター / un jersey de color azul 青色のセーター。

表 1：スペイン語の色彩表現—単語形式

単純語	(I) 形容詞	amarillo 黄色い, bermejo 朱色の, blanco 白い, canelo 赤褐色の, castaño 栗色の, cenizo 灰色の, cerúleo 紺碧の, moreno 浅黒い, negro 黒い, oscuro 黒っぽい, pardo 褐色の, prieto 濃褐色の, purpúreo 赤紫の, rojo 赤い, rubro 真紅の; azul 青い, carmesí 深紅色の, celeste 空色の, gris 灰色の, marrón 茶色の, verde 緑の
	(II) 名詞	ámbar 琥珀色, añil 藍色, beige (beis) ベージュ色, berenjena ナス色, bermellón 鮮紅色, burdeos 赤紫色, café 暗褐色, canela 赤褐色, caqui カーキ色, carmín 深紅色, ceniza 灰色, chocolate チョコレート色, cian 青緑色, coral サンゴ色, corinto ワインレッド, crema クリーム色, escarlata 緋色, esmeralda 浅緑色, fucsia ボタン色, granate えんじ色, granza アカネ色, índigo 藍色, lavanda 薄紫, lila 薄紫, limón レモン色, magenta 深紅色, malva 薄紫, máfil 象牙色, naranja 橙色, ocre 黄土色, plomo 鉛色, púrpura 赤紫色, rosa 桃色, salmón サーモンピンク, sepia セビア色, turquesa 青緑色, turquí 濃青色, verdete 緑青色, vino ワイン色, violeta 薄紫
派生語	(III) 形容詞	(-áceo): grisáceo 灰色がかった, rosáceo ピンク色の, violáceo 紫色がかった; (-ado): aceitunado オリーブ色の, azulado 青みがかった, bronceado 赤銅色の, colorado 赤い, dorado 金色の, encarnado 赤みがかった, irisado 虹色の, morado 暗紫色の, naranjado 橙色の, perlado 真珠色の, plateado 銀色の, rosado ピンクがかった, violado 紫色の; amoratado 紫がかった, anaranjado オレンジ色の; (-al): negral 黒っぽい; (-ecino): blanquecino 白っぽい; (-ejo): amarillejo 黄色っぽい; (-enco): azulenco 青みがかった; (-eo): carmineo 深紅色の, gríseo 灰色の; (-erón): verderón 緑色がかった; (-i)ento: amarillento 黄色がかった; ceniciento 灰色の; (-illo): blanquillo 白っぽい; (-ino): ambarino 琥珀色の, azulino 青みを帯びた, opalino オパール色の, verdino 深緑色の; (-inoso): blanquinoso 白みがかった, verdinoso 緑色がかった; (-isco / -izco): pardisco 褐色がかった; blanquizco 白っぽい, negrizco 黒っぽい; (-izo): bermejizo 赤っぽい, blanquizo 白っぽい, cobrizo 銅色の, pajizo 麦わら色の, rojizo 赤みがかった; (-ón): azulón 鮮やかな青の, bermejón 朱色がかった; (-oso): amarilloso 黄色がかった, azuloso 青みがかった, carminoso 赤っぽい, cenizoso 灰色がかった, verdoso 緑色がかった; (-usco / -uzco): pardusco 褐色がかった, verdusco くすんだ緑色の; blancuzco 白っぽい, negruzco 黒っぽい, parduzco 褐色がかった
複合語	(IV) 形容詞	azulgrana 青とえんじ色の, blanquinegro 白黒の, negriazul 黒と青の, rojiblanco 紅白の, rojinegro 赤と黒の, verdegay 薄緑の, verdemar 海緑色の, verde(o)scurο 暗緑色の, verdiblanco 緑と白の, verdinegro 緑と黒の
	(V) 名詞	verdecedón / verdeceladón 青磁色

2.2. 色彩名詞 (転義した色彩語)

同じく単純語の第2グループ(II)に属するのは añil「藍色」, naranja「オレンジ色」, rosa「ピンク(バラ色)」, violeta「うす紫色(スマイレ色)」などやはり基本的な色彩を表すものとそれほど使用頻度が高くない語が含まれる(上記表1)。このグループの語は元来、果実、花、染料、鉱物、食品など物を表す名詞であり、その物に特有の色彩からの類推により二次的に色彩名を表

す語義が生じたものである。色彩名として用いられる場合、本来の文法性にかかわらず必ず男性名詞である。²⁾

このグループの語彙を上記表1では名詞と分類したが、これらが修飾語となる場合、名詞なのか形容詞なのか、議論の分かれるところである。下記の5語について辞書の記述を見ると、スペイン・アカデミアの3種類の辞典も見解が一致しない(表2)。³⁾

表2：辞書の品詞記述

	añil	naranja	púrpura	rosa	violeta
RAE (2001)	m	m*	f	adj	m
RAE (2005a)	adj	m	adj	adj	adj
RAE (2006)	m**	m**	m**	m**	m**

m=男性名詞, f=女性名詞, adj=形容詞.

* しばしば同格になると記述。

** 形容詞としても用いられると記述。

第1グループの基本色彩語を含め、色彩語の品詞をどう規定するかという問題は古くから文法家の間でも意見が分かれている。形容詞とする説、名詞とする説、さらに最近では名詞・形容詞両方の範疇に属するという説もある(Fábregas, 2002: 17ss. 参照)。このように意見が対立するのは、色彩語の呼応の仕方が一様でない上に、統語的にも比較表現を受け入れない、通常は前置できないなど形容詞としては特異性を示すためである。Bosque (1999: 68) は第2グループに該当する色彩語は名詞であり、修飾語となる場合は名詞の同格用法であって、無変化であるのが文法的とする。ただし、rosaだけはすでに多くの話者にとって形容詞となっており、変化すると主張している。

この問題について筆者は単純に呼応の有無を基準として分類し、修飾語となる場合に呼応するIのグループは形容詞とし、呼応しないのが普通であるIIのグループは名詞と見るのが妥当と考える。しかし、II類は語により呼応に関してゆれがあることは確かである。実際の使用例を調べると、いずれも性変化は行わないが、rosaに限らず数に関しては呼応する場合としない場合があり、一様ではない。語によって異なるばかりでなく、同じ語でも常に一定しているわけではないようである。そこで、añil, naranja, violeta, púrpura, rosa, ámbarの6語の呼応についてネイティブスピーカー4人に対し下記の調査を行った。⁴⁾ 調査回答は同じ人が異なる呼応を容認している場合もあるので、合計数は一定ではない。ちなみに、これらの語はすべて物を表す名詞から色彩表現に転化したもので、本来の名詞としてはañil m.「藍」, naranja f.「オレンジ」, violeta f.「スミレ」, púrpura f.「アケキ貝」, rosa f.「バラ」, ámbar m.「琥珀」を意味する。

- (1) a. los pantalones añil 藍色のズボン 3 (v, a, m)
 b. los pantalones añiles 2 (m, t)

(2)	a. las camisas naranja オレンジ色のシャツ	3 (v, a, m, t)
	b. las camisas naranjas	2 (a, m)
(3)	a. las faldas violeta 薄紫のスカート	4 (v, a, m, t)
	b. las faldas violetas	1 (m)
(4)	a. las flores púrpura 紫色の花	4 (v, a, m, t)
	b. las flores púrpuras	1 (m)
(5)	a. las blusas rosa ピンクのブラウス	2 (m, t)
	b. las blusas rosas	3 (v, a, m)
(6)	a. las lámparas ámbar 琥珀色のランプ	4 (v, a, m, t)
	b. *las lámparas ámbar	0

上記の結果を見ると、rosa, añil, naranja については複数変化を行う場合と無変化の場合が拮抗しており、rosa のみが著しい特異性を示すとは言えない。他方、violeta, púrpura は無変化の場合が多く、⁹⁾ ámbar については無変化の場合しか容認されることがわかった。ámbar 以外の語は名詞と形容詞の境界に位置する形式であると考えられ、無変化の場合は名詞の同格用法と見なすべきであるが、呼応する場合は形容詞と見なすことも可能であろう。こうしたばらつきは、それぞれの語の色彩表現としての定着の度合いを反映するものと考えられ、完全な名詞である ámbar と形容詞化することの多い rosa との間に次のような推移的段階を想定することができる。

(7) ámbar > púrpura, violeta > añil, naranja > rosa

色彩を表す語は修飾語として定着するにつれ名詞から形容詞に転換すると言えるだろう。

2.3. 派生語

色彩表現の第3のグループ(III)は名詞に接尾辞が付加された派生語で、形容詞として語尾変化を行う(上記表1)。このグループには ámbar > ambarino 「琥珀色の」、ópalo > opalino 「オパール色の」、rosa > rosado 「ピンク色の」など物を表す名詞から派生した色彩形容詞および azulado 「青みがかった」、azulenco 「青っぽい」、azulino 「青みを帯びた」、azulón 「鮮やかな青の」、azuloso 「青みがかった」のように基本色彩語から派生した色調を表す語が含まれる。これらの派生語を形成する接尾辞の中には一定の語彙だけに固定化したものと多数の語に見られる生産性が高いもの(p.ej. -ado, -izo, -oso)がある。

2.4. 複合語

色彩表現の中には通常二つの語根から成る複合語のグループIVおよびVがある(上記表1)。正書法上は一語として書かれ、文法的にも語としての特徴を持っている。このグループに属する語彙は非常に少ない。その第1のグループ(IV)は blanquinegro 「白黒の」、negriazul 「青と黒の」、

rojinegro「赤と黒の」などの語形変化を行う形容詞である。形態的には、これらの例のようにつなぎの母音 -i- を含む語と含まない語 (p.ej. azulgrana「青とえんじ色の」、verdegay「薄緑の」) がある。Fábregas, (2002; 103)によれば、つなぎ母音を含むものは等位構造で、一般に2色が並立していることを表すのに対し、つなぎ母音を含まない語は2色が並立する場合と中間色を表す場合があると言う。第2のグループ (V) は通常無変化で、名詞と見なしてよいものであるが、verdecedón「青磁色」しか見つからなかった。

3. 句形式の色彩表現

3.1. 句形式の構成

スペイン語には上記のような単一の語形式のグループに対して、正書法上は通常2語、あるいは前置詞を含む3語から成る句形式の色彩表現が多数存在する(表3参照)。⁶⁾ これらを統語論的な単位である句 (sintagma, grupo) と見なすか、形態論的な単位である複合語 (compuesto) と見なすかは文法上の問題となっている。しかし、さしあたり結論は先送りして句形式として扱うことにする。

表3：スペイン語の色彩表現—句形式

(I) 名詞＋形容詞	amarillo claro, amarillo dorado, amarillo mate, amarillo oscuro, azul celeste, azul claro, azul eléctrico, azul fuerte, azul real, azul marino, azul oscuro, azul pálido, azul turquí, azul ultramarino, azul verdoso, azul vivo, blanco lechoso, blanco mate, gris claro, gris marengo, gris oscuro, gris plateado, marrón oscuro, marrón rojizo, morado claro, morado oscuro, naranja claro, negro mate, rojo anaranjado, rojo brillante, rojo chillón, rojo claro, rojo escarlata, rojo oscuro, rojo pálido, rosa claro, rosa coralino, rosa viejo, rosa vivo, verde claro, verde fresco, verde oscuro
(II) 名詞＋名詞	amarillo cromo, amarillo huevo, amarillo limón, azul añil, azul azafata, azul cielo, azul cobalto, azul índigo, azul pastel, azul topacio, azul turquesa, granate corinto, gris perla, gris rata, naranja calabaza, naranja fosforito, rojo bermellón, rojo burdeos, rojo cereza, rojo ciruela, rojo clavel, rojo fuego, rojo granate, rojo rubí, rojo sangre, rosa fosforito, rosa fucsia, verde agua, verde botella, verde esmeralda, verde eucalipto, verde hoja, verde lima, verde manzana, verde mar, verde oliva, verde perla, verde pistacho, verde trigo
(III) 名詞＋前置詞＋名詞	azul (del) agua, azul de Sajonia, azul de Prusia, azul (de) ultramar, verde (de) musgo,

これらの形式は、その構成素の品詞から見ると、3つの類型に分けられる。すなわち、I型「名詞＋形容詞」: azul claro「淡青色」、azul marino「濃紺色」、azul verdoso「ブルーグレイ」など。前の第1項が主要部で、後の第2項の形容詞がその修飾語となる。後述のとおり、第1項は男性単数名詞としての振る舞いを見せる。第2項に現れる claro「明るい、淡い」および oscuro「暗い、濃い」など色の明暗を表す形容詞は表に挙げた以外にもさまざまな基本的色彩語を修飾することが可能である。次に、II型「名詞＋名詞」: verde botella「暗緑色」、verde esmeralda「エ

メラルドグリーン」, verde musgo 「モスグリーン」など。この場合も第1項が主要部で、男性名詞として振る舞い、これを修飾する第2項の名詞は同格関係となる。最後に、III型「名詞+前置詞+名詞/形容詞」: azul (del) agua 「水色」, azul de Prusia 「紺青」, azul de Sajonia 「サククスブルー」など。この種類は、前置詞が省かれることもあり、その場合はII型と同型になる。これらの類型は、いずれも意味上細かい色調を表す形式で、単語形式の色彩表現に比べると出現頻度は低い。

3.2. 句形式の呼応

これら句形式の色彩表現は、修飾語として名詞を修飾する場合、その呼応の仕方は必ずしも一様ではない。この点に関してアカデミアの語法辞典 (RAE, 2005b: 144) は、2項から成る形式で後の第2項が claro, oscuro などの形容詞である場合、つまり小論で言うIのグループに該当する形式は被修飾名詞と性・数の呼応を行わない、つまり無変化が普通であるとする。たとえば、ojos azul claro 「淡青色の目」。無変化である理由は男性名詞 color が省略されていると想定されるためであると言う。しかし、第2項が名詞と呼応する場合もあるとされる: La tierra era marrón clara. 「大地は薄茶色である」。一方、第2項が名詞の場合、つまり小論のII型に該当する場合は常に無変化とされる。たとえば、pantalones verde bodella 「暗緑色のズボン」。一方、Bosque (1999: 68) によると、第2項が形容詞の場合 (上記I型)、それは第1項の男性名詞に呼応し、全体として名詞句を構成して他の名詞を同格関係で修飾する。また、第2項が名詞の場合 (上記II型) は第1項と複合語を構成し、やはり全体としては他の名詞を同格で修飾すると説明している。いずれにせよ、I-II型の形式が被修飾語に対して原則として無変化であるとする点は一致している。この結果、これらの形式自体は男性単数形となる。

実際に、III型も含めてこれらの形式は被修飾語に対して無変化であるのが普通である。⁷⁾ こうした点を踏まえて、小論ではいずれの型も第1項は名詞で主要部をになっており、I型では第2項の形容詞が第1項を修飾し、II型では第2項の名詞が第1項を同格で修飾し、III型は後の前置詞句が第1項を修飾していると考えられる。いずれも句全体としては名詞句を構成し、被修飾語に対し同格で修飾を行っているため、無変化 (形態的には男性単数形のまま) なのであると見なす。ただし、被修飾語との呼応に関して現実には非常に多様な事例が観察されることも事実である。たとえば、インターネットで検索すると、これら句形式の第2項が名詞であるか形容詞であるかにかかわらず、たとえば次のように4とおりの呼応の仕方が見られる。(8)は被修飾語がいずれも女性単数名詞の例、(9)は同じく男性複数名詞の例である。

- (8) a. piel rojo oscuro 深紅色の革
b. cola roja oscuro 深紅色のしっぽ
c. sangre rojo oscura 深紅色の血

- d. luz roja oscura 深紅色の光
- (9) a. ojos verde esmeralda エメラルドグリーン
 b. tus ojos verdes esmeralda 君のエメラルドグリーン
 c. inmensos ojos verde esmeraldas 大きなエメラルドグリーン
 d. el chico de ojos verdes esmeraldas エメラルドグリーンをした男の子

そこで、I型の rojo oscuro (10)-(11) および naranja claro (12)-(13), II型の verde esmeralda (14) という形式の呼応について前記と同じネイティブスピーカーに対して調査を行った。

(10)	a. los vestidos rojo oscuro 深紅色のドレス	3 (a m t)
	b. los vestidos rojos oscuro	1 (a)
	c. los vestidos rojo oscuros	1 (v)
	d. *los vestidos rojos oscuros	0
(11)	a. la piel rojo oscuro 深紅色の革	2 (a m)
	b. *la piel roja oscuro	0
	c. *la piel rojo oscura	0
	d. la piel roja oscura	3 (v a t)
(12)	a. la píldora naranja claro 薄いオレンジ色の錠剤	2 (a m)
	b. la píldora naranja clara	2 (v t)
(13)	a. las alfombras naranja claro 薄いオレンジ色のじゅうたん	4 (v a m t)
	b. las alfombras naranjas claro	1 (a)
	c. *las alfombras naranja claras	0
	d. *las alfombras naranjas claras	0
(14)	a. los ojos verde esmeralda エメラルドグリーン	4 (v a m t)
	b. los ojos verdes esmeralda	1 (a)
	c. *los ojos verde esmeraldas	0
	d. *los ojos verdes esmeraldas	0

この結果を見ると、いずれの形式も RAE (2005b) や Bosque (1999) の主張するとおり無変化の場合が多いと言えるが、呼応する場合も無視できないことがわかる。しかし、呼応する場合にはばらつきがあり、明確な傾向は見られない。ただし、II型のように第2項が名詞の場合 (14) は、その名詞が変化する例はないということが確認できた。

呼応の仕方から見れば、上記 (10c) los vestidos rojo oscuros, (12b) la píldora naranja clara のように第2項のみが語形変化している場合は、一般に文法的な逸脱と見なされるのであるが、形態論的な観点からすれば、句形式の屈折語尾が第2項に移行していて、形式全体として複合語と見なしてよい段階に達していると言えるかもしれない。実際に正書法上で次のようにハイフン付きで

結合して書かれる例が見られる：un joven morocho de ojos verde-esmeraldas 「暗緑色の目をしたがっしりした若者」。

なお、これらの複合形式は、どのグループも color を含む句を構成することがあり、この場合は2項とも男性単数形となる。この句が名詞を修飾する場合は前置詞deを伴うことが多いが、それが省略される場合もある。したがって、次のような形式が共存する：la piel de color rojo oscuro / la piel color rojo oscuro / la piel rojo oscuro（暗緑色の革）。

3.3. 句形式は語か句か

さて、前置詞句を含む III 型を除き、「名詞+形容詞/名詞」の2項から成る I-II 型は形態論的な複合語なのだろうか、それとも統語論的な句なのだろうか。これら形式は、呼応だけではなくその統語的特徴も特異性を示すため、⁹⁾ 議論の分かれるところである。Demonte (1999: 178) は I-II 型とも複合語と見なしているが、上記のように Bosque (1999) は I 型は名詞句、II 型は複合語と見なしている。Fábregas (2002) も同様に I 型は句と見なし、II 型は従位複合語 (compuesto subordinante) と規定している。⁹⁾ 一方、Suñer (1999: 534) は II 型の形式についても語彙的結束性が不十分であるとして複合語とは認めない。¹⁰⁾

この問題は語をどのように規定するかにかかっている。語という形式一般についてここで詳しく論じる余裕はないが、語は音韻、形態、統語の3つの局面で特徴付けることができる(寺崎, 2004 参照)。こうしたスペイン語の語の要件に照らして考察すると、問題の色彩表現は、2 類型とも完全な意味で語の資格を持っているとは言えない。特に重要と思えるのは、これらの形式が音韻的にはアクセントの単一性(語には1つの音節のみに強勢がある)、形態的には外的屈折(屈折語尾は形式の末尾に現れる)という語の要件を欠いていることである。したがって、どちらの型も複合語ではないと筆者は考える。

いずれにせよ、これらの形式の形態的特性や統語的な振る舞いは上記の論者たちも論じているように一様ではない。語とも句とも見ることのできる特徴を合わせ持ち、複合語と名詞句の境界にある形式であると言える。語の要件に照らして考えると、上記のとおり音韻的・形態的には一つの語と見なすことはできない。しかし、統語的には一つの語彙的単位として固定化されているという特徴があることも事実である。つまり、語の一部の条件は満たしていると見ることができる。寺崎(2004)ではこうした単位を単語複合(体)(complejo de palabras)と呼んだ。単語複合は複合語ではないが、それに近い句形式である。¹¹⁾ こうしたことから、小論では上記3類型の色彩表現はすべて単語複合を構成している名詞句であり、被修飾語に対し同格関係にあると考える。ただし、単語複合として扱うとしても、これらの色彩表現は、その形態統語的特性が一定ではなく、形式によって構成要素の順序の固定性や語彙的結束性に相違があるようである。こうした点を含め、単語複合一般について考察するのは今後の課題としたい。

4. 結論

スペイン語で単語形式の色彩表現はすべて男性名詞であるが、修飾語となる場合、使用頻度の高い基本的色彩語は形容詞として用いられ、語形変化を行う。より頻度の低い色彩語には物を表す名詞から転義した名詞が用いられる。これは修飾語となる場合も原則として無変化であり、被修飾語に対し同格関係にあると考えられる。しかし、こうした名詞も色彩表現として定着するにつれ、被修飾名詞と呼応を行い、形容詞化するようになると見られる。単語形式の色彩表現には、他に近似した色彩や中間色、色の併存などを表す派生語や少数の複合語もある。細かい色調を表す色彩表現としては単語複合を構成する名詞句が多数用いられる。このような名詞句は、修飾語となる場合、無変化が原則であるが、やはり色彩表現として固定化し、定着するにつれて被修飾語と呼応を行い、さらには複合語的な特徴を示すに至ることもであると見られる。

註

*本稿は日本ロマンス語学会第45回大会（長崎県立大学，2007年5月26日）において口頭発表した原稿を改訂・増補したものである。

1) 色彩語として定着するにつれ、句形式から形容詞に転化し、両形式が並立するものもある：黄色の>黄色い，茶色の>茶色い。

2) このようにスペイン語で色彩名が男性となるのは男性名詞 color が暗黙に意識されているためと従来説明されることが多い。しかし，Bosque (1999: 67-68) は色彩語が常に形容詞であって，color が省略されているとか，または暗黙のうちに諒解されているという説を否定する。Fábregas (2002: 29) も同じ立場に立ち，「色」を表す名詞が女性であるロマンス語，たとえばフランス語 (la couleur) でも色彩名は男性であることを指摘している。

3) 日本の代表的な西和辞典は形容詞としているものがほとんどである。宮城他 (1999) はすべて形容詞とし，rosa は数変化しないことがあると注記している。原他 (2005) は púrpura のみ女性名詞，他は形容詞としているが，añil 以外には無変化あるいは無変化が多いと注記している。

4) ネイティブスピーカーは3人 (a, m, v) がスペイン人，1人 (t) がコロンビア人である。

5) どちらも呼応させているのは同じ話者だが，無変化も認めていることがわかる。

6) もとよりこの表は包括的なものではなく，辞書と参考文献で確認された実例だけを挙げたものである。和訳は煩雑となるので省略した。

7) これらの形式が修飾語ではなく，色彩名として用いられる場合は複数形となり得る。この場合，II型は第1項に複数語尾が付く (los verdes botella) が，I型には変異が見られる (los verdes oscuro / los verdes oscuros / los verde oscuros)。

8) Bosque (1999: 69) は，II型の構造が名詞句間の同格という統語論的關係と複合語の構成素間

にある形態論的關係という2つの文法關係を持つとしている。また、Piera y Varela (1999: 4379-4380) は形成の繰り返し性 (recursividad) という点で I-II 型とも形態論的というより統語論的の形成に近いとしている。

9) Fábregas (2002) は従位複合語に対し、blanquinegro, azulgrana のような形式を等位複合語とする。これらの語は小論でも複合語として扱った。

10) Suñer (1999: 534) は (II) 型が複合語ではない論拠として第1項と第2項の間に他の要素を挿入することが可能であること (p.ej. un abrigo rojo *tirando a fuego*) および第2項を別の項と等位接続させることが可能であること (p.ej. un fondo azul *entre turquesa y cielo*) を挙げている。

11) 名詞的単語複合は一般に「名詞+名詞」、「名詞+形容詞」、「名詞+前置詞+名詞」のいずれかの構成をとる。この形式は音韻的あるいは形態的な観点から見ると、語の要件を満たしていないので、単一の語と見なすことはできない。しかし、統語的には、この種の形式は固定化しており、原則として構成素の順序は常に維持され、一部の構成素を入れ替えたり、一部の構成素だけを修飾したりすることはできない。

参考文献

- Bosque, Ignacio, 1999, El nombre común, en *GDLE*, vol. 1, 3-75.
- Demonte, Violeta, 1999, El adjetivo: clases y usos. La posición del adjetivo en el sintagma nominal, en *GDLE*, vol. 1, 129-215
- Fábregas, Antonio, 2002, *Gramática de los nombres de color en español actual*, Trabajo de investigación avanzado, Instituto Universitario Ortega y Gasset, Madrid.
- 原誠 (他) 編, 2005, 『クラウン西和辞典』, 三省堂.
- 宮城昇 (他) 編, 1999, 『現代スペイン語辞典』改訂版, 白水社.
- Piera, Carlos y Varela, Soledad, 1999, Relaciones entre morfología y sintaxis, en *GDLE*, vol. 3, 4367-4422.
- Real Academia Española [RAE], 1999, *Gramática descriptiva de la lengua española* [GDLE], Madrid, Espasa Calpe.
- , 2001, *Diccionario de la lengua española*, 22a. ed., Madrid, Espasa Calpe.
- , 2005a, *Diccionario del estudiante*, Madrid, Santillana.
- , 2005b, *Diccionario panhispánico de dudas*, Madrid: Santillana.
- , 2006, *Diccionario esencial de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe.
- Suñer Gracós, Avel·lina, 1999, La aposición y otras relaciones de predicación en el sintagma nominal, en *GDLE*, vol. 1, 523-563.
- 寺崎英樹, 2004, 「スペイン語における語の概念について」東京外国語大学『語学研究所論集』.